

ルル

土屋 友美賀

四月の夜の空気には、まだ冷たさが残っている。仕事帰りに近所のスーパーに向かった水田暁美（みずたあけみ）は、入り口の手前で立ち止まった。ポールにリードで繋がれた一匹の犬が、店の中を見つめながら座っている。買い物をしている飼い主を待っているようだ。

茶色の短毛、ピンと立った耳、濡れた鼻。

「ルルにそっくりだ」

暁美は呟いた。

ルルは、彼女の小学校の同級生だったヨウが飼っていた柴犬だ。ヨウは周囲の注目を集める長身の美少女で、ショートカットが彼女の魅力を引き立てていた。彼女が暮らす古びた木造の一軒家は、玄関のドアノブの金属が剥がれ、窓ガラスは雨風にさらされて薄汚れていた。

駐輪場を兼ねたわずかな庭の端には、割れたバケツや泥で汚れた鉢が無造作に置かれており、狭い庭に詰め込まれるように犬小屋が置かれていた。ヨウの父親の手作りらしい。

暁美がヨウの家に遊びに行く度、彼は不機嫌そうに眉間にしわを寄せていた。すれ違ふと、酒とタバコの臭いが漂ってくる。挨拶をしても笑顔を見せることはなく、面倒くさそうな表情で一瞥

する。手作りの犬小屋の話聞いた暁美は、あの父親にも優しい面があるのかと妙に感心した。

ルルは人懐っこい犬だった。真っ黒に光るつぶらな瞳に、ほっそりとした体格。あまりシャンプーをしてもらっていないせいか、触り心地はややジツトリとしていた。暁美が顔を見せると、尻尾を大きく振りながら近づいて、挨拶代わりに顔を舐める。

彼女はルルから漂ってくる犬独特のにおいが好きだった。

引つ込み思案な暁美とちがって、ヨウはクラスの中心的存在だった。嫌いなものは嫌いとはっきり主張する。意見を求められても言葉に詰まってしまう暁美に対し「おどおどしないで、もっとはっきり言いなよ」と言い放った。

勉強もスポーツもたいして得意ではなく、自信のない暁美にとって彼女は憧れであり、同時に恐怖の対象でもあった。そのくせ放課後によくつるんでいた理由は、仲間から外されて一人になりたくないという思いだけではない。

ルルに会いたかった。犬を飼えないマンシヨンに住んでいた暁美にとって、ルルとの触れ合いは最も幸せな時間だった。ヨウの家に遊びに行っても、和室でゲームをしている友人たちの目を逃れては庭先に出ていき、思う存分ルルを撫でた。「私はヨウちゃん以上にルルを大切に思っている」という自負心さえあったほどだ。

小学校六年生の七月、暁美にとって忘れられない事件が起きた。ルルが脱走し行方不明となったのだ。ヨウが夕方家に帰ると、ルルの首輪の金具が外れており、犬小屋にいるはずの姿が見当た

らなかったという。

脱走の翌日、教室で会ったヨウは自分に言い聞かせるように言った。

「犬には家に帰ってくる本能があるんだって。だから、数日以内には、絶対帰ってくるわ」

声が震えていた。普段は弱音を吐くこともなく気丈に振る舞う彼女が動揺している姿に、晧美は何と返していいのか分からず、ただ黙り込んだ。

近所のお店や駅の改札に張り紙をして情報を呼びかけるも、手がかりさえ見つからないまま時間が過ぎた。

「ルルのこと、何か分かったの？」

「ううん、まだ。でもきつと大丈夫」

その声に力強さはなかった。毎日教室で彼女の様子を見ていた晧美は、かわいそうという同情心ではなく、抑えきれないほどの恐怖を感じていた。

なぜなら、晧美こそルルを脱走させた張本人だったからだ。

ルルが実際にどうなったかは分からないが、交通事故に遭ったのではないか、どこかの山に迷い込んで餓死したのではないかといった悪い想像ばかりが膨らんだ。

真実を話せないまま、夏休み明けの九月にヨウは引越してしまった。引越し先は東海地方のどこかということは覚えているが、詳しいことは分からない。これから会うことも恐らくないだろう。

スーパーから、中年の男性が出てきた。犬は立ち上がり、しっぽを振りながら彼を出迎える。飼い主に連れられて去っていく犬の姿を見て、晧美は我に返る。十年以上前のルルの脱走事件を引きずっている自分に、ため息をつく。

中学校に入ってから、晧美は人が変わったように勉強に励み、高校受験、大学受験ともに成功した。大学に入ってからのは就活に有利な資格を取り、就職した今も仕事で必要なスキルを懸命に磨いている。それも『勉強もスポーツもできない、おどおどした子』というレッテルを返上するためだ。だが、どんなに周囲からの評価が変わろうと、ルルに似た犬をみる度に十年前の脱走事件がよみがえる。罪悪感は消えることはない。

陰鬱とした気持ちを抱えたまま、晧美は帰路に就いた。

翌朝、目覚めてすぐにカーテンを開けると、外は快晴だった。陽気な日の光が目にも痛い。歯を磨いても消えない苦さが口に残っている。

最寄り駅である三鷹から電車に乗り込み、勤め先である『上松製作所』のオフィスに到着した。

同社は戦前創業の大手電機部品メーカーだ。電機部品の特定の分野では業界シェア一位を誇り、世間的には『安定した伝統的大企業』として知られている。

晧美は新卒で入社して以来、営業部内の企画推進チームに所属している。請求書等の事務処理のほか、営業資料や企画書の作成を行うチームだ。企画推進の業務を専任で行っている従業員は晧

美とパートで働く中年の事務員のみで、資料の作成業務は曉美に集中していた。

営業部員は四十代後半から五十代前半の男性が大半を占めている。接待を繰り返す、顧客と関係性を深めることで受注につなげることを得意とする一方で、顧客の課題や提案内容を整理して資料に落とし込むことは苦手な部員が多い。飲み込みが早く、パソコンスキルも高い曉美に一部の社員は頼りきりとなっていた。

「また今日も残業か」

午後六時過ぎ、パソコンに向かい続ける曉美に、上司である宮井が声をかけてきた。

宮井は過去に車メーカーとの新規取引で実績を上げており、営業マンとして社内でも高く評価されている。スーツの着こなしも見事だが、部下に対してどこか見下したような高圧的な態度をとるところがあり、曉美は彼が苦手だ。

「はい。いくつか緊急の資料作成の依頼があって、どうしても終わらなくて」

「あんまり残業時間長くなると、管理する側も困るから。周りに振るとか、生産性上げるとか、少し気を付けて。それじゃお先に」
曉美の仕事の状況を知ろうともせず立ち去っていく宮井の背中を見ていると、口には出せないが不満が募ってくる。

どうして手伝おうとも、業務の状態を把握しようともしないのか。せめて優しい言葉をかけてくれないのか。

だが、家族がいる彼らの方が早く家に帰りたいがるのは、当然なのかもしれないと思う。

胃から上がってくるものを抑え込むと、身体が震えた。

曉美の体に異変が起き、出社できなくなったのは翌日からだった。

出社のために最寄り駅に向かった彼女は、改札にサラリーマンたちが吸い込まれていく光景を見て何かがおかしいと気が付いた。

アルコールを飲み過ぎたときのような眩暈めまいと頭痛を感じ、ついには頭を鈍器で殴られたような痛みに襲われたのだ。思わずその場に座り込んだ。

後ろから来る人たちに迷惑だと思いつつも、自力で立つことができない。心配して駆けつけてきた駅員の手を借りて救護室で休ませてもらうと、ようやく症状が落ち着いていた。今までも通勤途中で胃が痛くなるくらいのことは何度もあったが、こんな経験は初めてだった。

体調不良による遅刻を電話で報告すると、宮井は突き放すように言った。

「他のメンバーから聞いたぞ。A社への資料の件、君が進めているそうだな。A社への次回の提案が通るかどうかで、予算達成が決まるんだ。ちゃんと間に合うだろうな」

大型新規受注を賭けたA社への提案資料の作成は、元々別の営業部員に任されていたものだ。それにもかかわらず、担当者が途中で音を上げ、期日近くになって曉美に業務を押し付けた。

「頼むよ、ほんとに。根性のない若手がただでさえどんどん辞め

て人手が足りてないからな。よろしく」

何一つ言い返せないまま、一方的に電話が切られた。

この日以来、出社しようと駅に向かうだけで同じ症状が現れるようになった。明らかに体が出社を拒否している。会社に行こうとしなければ暁美はいたって元気だった。

入社して三年、一度も病欠をしたことがなかった彼女の連続的な欠勤に焦ったのか、会社側は産業医との面談設定を勧めてきている。

いっそのこと、仕事を辞めた方が迷惑をかけないのかもしれないなどと考えていると、気が付けば週末になっていた。

土曜日の朝。暁美の携帯電話がけたたましい着信音を立てた。惰眠^{だん}をむさぼっていた彼女は、画面を見て驚いた。呼吸を整えて電話に出る。

「久しぶりね。元気にしているの」

暁美の母親、律子だ。暁美の実家がある千葉県原市で一人暮らしをしながら、近くの病院で看護師として働いている。お互いに仕事が忙しいこともあり、普段はときどきメールでやりとりをするだけで、電話をするのは数カ月に一度だ。

元気なわけではない。そう言いたかった。が、母親の口癖が頭をよぎると、つい嘘を言ってしまった。

「うん、元気でやってるよ」

「そう、良かった。あなた昔からどんくさい所があるから、心配なのよ」

「それで、何の用事なの」

「実はお義姉さんが、ぎっくり腰になっちゃったの。数日安静にすればよくなりそうなんだけど、週末の買い物とか食事とか、大変でしょう。お義姉さんは子どもたちも近くに住んでないし。だから、せめて今週末はお買い物行ったり、お料理手伝ったりしてあげてほしいのよね。あんた、午後からいいから今日こっち帰ってこれないかしら」

「お母さんはおばさんの所に行けないの」

「今日と明日は仕事で、しかも夜勤なのよ」

律子の年齢は四十九だ。五十歳近くにもなつて、まだ夜勤を辞めてないのか、身体は大丈夫なのかと不安が募る。

「同僚の若手も、子育てする子が増えているの。私みたいな、子どもが手を離れた人が頑張らないと。それに、お金も貯めておきたいし。人に迷惑はかけられないでしょう」

律子の言葉に、暁美の胸はずしんと重くなる。

もしお父さんがまだ生きていたら。これまで何度も繰り返してきた問いが、頭の中をグルグルと駆け回る。

父親の謙太郎は暁美が十一歳の頃、交通事故で死んだ。医師であった彼は、夜勤からの帰宅中に信号無視をした車にはねられて即死した。享年四十二歳。霊安室で泣き崩れていた母が、葬式では取り乱すこともなく参列者へ丁寧に敬礼を述べていたことを、今でもありありと思い出す。

父が死に一人親となった律子は、口癖のように「人に迷惑をかけるな」と言うようになった。子どもを一人で育てあげ、自律し

て生きていく上での覚悟だったのかもしれない。だが、母親の口癖は暁美の脳裏にこびりつき、どんな行動をするときにも浮かんでくる呪いとなっていた。

霊安室で泣き崩れていた律子の後ろ姿が臉に浮かんでくる。半ば無意識に、暁美は返事をしていった。

「うん、分かった。今から向かうね」

伯母宅の最寄り駅である千葉県市原市『五井駅』に到着したのは午前十一時過ぎであった。ここからバスに乗れば目的地に到着するが、次の発車時刻まで三十分ほど待たなくてはならない。どうしたものかと考えあぐねながらふと空を見やると、青く痛いほどまぶしい空が広がっている。暁美は一人眩いた。

「久しぶりに来たなあ」

ヨウヤルと共に過ごした思い出の町ではあるが、帰ってきたのは約五年ぶりだ。見たことのない店やマンションもいくつかできていた。時間つぶしに、駅周辺を見渡しながら歩き始めた。

ふと通りの名前を見ると『更級通り』とある。この辺りは、更級日記の作者が都に行く前に移り住んだとされる場所だ。物語に夢中になった青春時代の後、夫に先立たれ現実を突きつけられた彼女の姿は、母親の律子と重なる。

しばらく歩くと、小学校時代によく遊んだ公園にたどり着いた。ベンチに腰を掛ける。向かいにあるブランコでは、子どもたちが「立ち漕ぎ」の練習をしている。

前に行って、後ろに行って。

繰り返される動きを見ると、自分がどこにいてだれなのか、段々とぼやけてくる。

「暁美だよね？」

突然の呼びかけに、飛び上がるほど驚いた。顔を上げると、目の前に長身の女性が立っている。

地元の人だろうか。ジーンズにビーチサンダルを合わせ、体のラインがよく分かる白いTシャツの袖からはたくましい二の腕がのぞいている。金髪に近い髪色のショートカットと、目つきの鋭さを強調するような濃いアイラインが印象的だ。暁美はヤンキーに声を掛けられたと思い、身を縮めた。その様子を見た女性は一気に表情を和らげて言った。

「ごめん、誰か分からなくてビックリするよな。ヨウだよ。小学生くらいのときによく遊んだでしょ」

「ヨウちゃん？」

彼女は暁美の横に腰掛けた。

「十年ぶりとかだよ。子供産んで太っちゃったし。いやーたまに息子をダンス教室に送って帰ってきたんだよ。マジでびっくり」

ヨウは相手の様子も気にせず、しゃべり続けた。

「暁美には言ってなかったかもだけど、あたしん家、離婚して。それで中学からオカンの地元の名古屋に戻ってずっと住んどったのよ。で、結婚して子供ができた後にダンナの仕事先が市原市内になったんだよ。せっかくだったら土地勘あるところ住みた

いって言って、この辺に住んどのよ」

相槌を打ってはいるが、晁美は情報量の多さに混乱していた。

「ていうか元気にしとった？ 今はどうしとるの」

自分が今どんな人で何をしているのか、見失っているときに人に会うのは辛い。晁美は会社を休んでいるとは言わず、都内の会社で働いており、今日は伯母の手伝いをするために地元に戻ってきたと言った。

「何ていう会社で働いとるの」

「上松製作所ってとこ」

小声で返事をした晁美に対し、ヨウは大きな声で言った。

「へえー、スゴイね。そんな大手企業、普通行けないよ。あたしなんてさ」

話題は子どもを三人育てる苦労に切り替わり、晁美はバスがあるからとも言えず、ただ相槌を打ち続けるしなくなってしまう。最近はいブードルの子犬も家族に迎えたらしい。犬に話題が移ったところで、ヨウは思い出したように言った。

「あ、そういえばさ。いつか会ったら聞きたいと思ったことがあるんだよね」

返答を待たず、彼女は淡々と続けた。

「ルルのこと、なんで逃がしたの」

晁美の全身から血の気が引いていく。さっきまでここにあったはずの穏やかさが一気に過去に吸い込まれていく。何か言おうにも、声帯が完全に閉じて言葉を出すことができない。

「ルルを見つげるための手がかりを必死で探してた時、近所の人

に言われたの。ルルがいなくなった日、晁美がひとりうちの家の庭から出てきたって」

確実な証拠ではない。言い訳や否定の言葉は沢山あった。だが、沈黙の後によくやく発された言葉は「ごめんさい」であった。

ヨウが手を上にあげる。

(殴られる)

晁美は本能的に体を硬直させ、目を固くつむった。次の瞬間に訪れたのは痛みではなく、肩にそっと置かれた手のぬくもりだった。

そっと目を開け、ヨウの顔を見る。彼女の瞳はただまっすぐに

晁美を捉えていた。

「謝らなくていいって」

「どうして」

許しを乞うように声を絞り出すと、ヨウはフツと笑った。

「あのときのあたしの家、崩壊状態だったんだよね。オトウは家族に暴言を吐いたり、家でよく暴れてたし。ルルのこと殴ったり蹴ったりとかもあったし。あたしも止めに入って殴られてたし」

「最初にこの話を聞いたときは、殴り倒してやりたいと思ったよ。けどさ。ルルのことメチャクチャ可愛がってたヤツが、理由なくそんなことするわけないって思ったんだ」

ヨウの瞳を見つめ返しながら、晁美は心の中で叫んだ。

(ちがう)

「もしかして、晁美はルルが虐待されてるの、知ってたんじゃないかって」

(ちがう)

「多分ルルのこと、何とかしてあげようとして、突発的に逃がしちゃったんだろうなって思ったんだよね」

暁美はあの日のことを手に取るように鮮明に思い出していた。

「ちがう！」

暁美は立ち上がり、これまでの人生で出したことがないくらい大声で叫んだ。ブランコで遊んでいる子どもたちが、顔をあげて二人を見た。

「あの日は、死んだお父さんの誕生日だった。どうしても一人でいるのが辛くて、ふとルルに会いに行ったの。そしたら、ルルはいつもしてくれるみたいに、尻尾を振って私に近寄ってきてくれた。ルルを撫でたら、何か、お母さんの泣いてた顔とか、お父さんの笑ってた顔とか、ヨウちゃんに『おどおどしてる』って言われたこととか、色んなことが一気に頭の中で爆発して。こんなにも嫌だとか辛いとか思っているのに、何一つ変えることもできずにうずくまっただけの自分に、どうしようもない嫌悪感が襲ってきて」

溢れ出した言葉は止まらなかった。

「気が付いたら、ルルのリードに手が伸びてたの。この留め具を外せば、何かから楽になれる気がした。ルルはすぐに逃げなかつたし、どうしていいか分からない感じだったけど、私は留め具を付け直すこともしなかった。最初は周りをキョロキョロしてたけど、最後にじっとこっちを見た後に急に走り始めて。あつという間にいなくなっちゃったの」

暁美の目から涙がこぼれる。

「その後ろ姿を見て、変な解放感を勝手に感じてた。だけど次の瞬間、やばい、どうしよう、大変なことしちゃったって、思い直して走った。だけど全力で走るルルに、全然追いつけなくて。ごめんなさい本当にごめんなさい」

暁美は両手で顔を覆い、肩を震わせた。そのまま沈黙の時間が過ぎた。

「これ見て」

泣きはらした暁美の顔の前に、ヨウがスマホを突き出した。涙をぬぐいながら画面を見ると、ヨウと一匹の犬が写っている。毛は白く体は細く、見るからに老犬だ。

「ルルだよ」

暁美は目を丸くした。

「ルルが脱走した日の夕方、オカンの友達の家の前にルルが座ってたんだって。何回か預けたことがあるだけなんだけど、ホントよく覚えてたよね。すぐにオカンに連絡があつて、迎えに行ったら、めちゃくちゃ尻尾振って飛びついてきたらしい」

「でも、いくら探しても見つからなかったって」

「実はさ、オカンが迎えに行ったのに、ルルが全然帰ろうとしなかったの。その様子を見て、オカンは思ったらしいんだよね。子どもを理由に離婚を避けてたけど、本当にそれでいいのかって」

夫のDVに悩みながらも経済的な不安から離婚を避けていたヨウの母親は、ルルの脱走を一つのきっかけだと考えたらしい。家族に言えば家に連れ戻されることは明白だったため、彼女はルル

の居場所を家族のだれにも告げずに友人宅に預けた上で、離婚の準備を進めた。父親との別居後、再びヨウと共に暮らし始めたルルは、十六歳という高齢ながらまだ生きているらしい。おばあちゃんだから、目も見えにくくなって大変だけど、とヨウは付け加えた。

ルルは生きていた。暴力や飢餓もない平和な暮らしの中で。元気に暮らすルルの姿を想像すると、また涙が止まらなくなってしまう。「ちょっと待って」と言いながら立ち上がったヨウは、自販機で買ってきたアイスコーヒーを眺美に渡しながらかつた。

「あなたの動機は怒りとか、おじさんが亡くなった後のやりきれなさとか、そういうものだったかもしれないけどさ」

コーヒーを一口飲み、彼女は言う。

「ルルも私たち家族も、あの脱走事件をきっかけに新しい人生になったわけよ」

「でも」

買ってもらったコーヒーの缶を撫でながら、眺美は呟いた。

「それって結果論だよ。たまたまそうなったけど、ルルの脱走がなければ、家族みんなであの場所で暮らせていたかもしれない。やっぱり私がやったことは最低だよ」

ヨウは、眺美の肩をつかみ、顔を覗き込んだ。力の強さに、肩がギシリと軋む。

「それはちがう。ルルだって、家に帰ろうと思えば帰れたのに、そうしなかった。それで、あたしのオカンは、ルルの脱走をきっかけに父親と別れることを選んだ。あたしもオカンと一緒に暮ら

すことを選んだ。離婚とかもハタから見たらいいことじゃないかもしれないけど、誰がどういうかとかは、関係ない。あんたは取っ掛かりは作ったかもしれないけど、これは全部ルルやオカンやあたしの選択の結果なんだよ」

選択という言葉が眺美の内側で響く。「人に迷惑をかける」という教えにただ忠実に生きてきた自分は、一体何を選んできたのだろう。

「私はダメだな。ルルを突発的に逃がしちゃったし、その後だって社会の常識とかに縛られて、ただ流されるだけで自分も持たずに生きてきちゃった気がする」

「それはちがうと思うよ。ルルを逃がしたのは、この現実を変えたいっていう思いがあったからでしょ。それに、今だって他の生き方だってできるけど、この瞬間も、今の自分であることを選んだよ」

ルルを逃がしたこと。母親の教えを呪いのように鵜呑みにして、いつも周りの顔を窺って生きてきたこと。誰の仕事も断らず、一人で抱え込んできたこと。会社に行けなくなったこと。

言われてみれば、誰からも強制なんてされていない。自分自身が選んできたことだ。

「どんな自分でいたいか、それぞれ自分で決めて生きていけばいいと思うんだよ」

大声で笑うヨウの顔に、子どもを見守る母親の慈愛がにじんでいる。

「なんか、ヨウちゃんって人生の先輩って感じだね」

「え？ 何よくわからんこと言っとんの」

彼女の横顔は、母親から友だちとはしゃぐ少女になっていた。

駅のロータリーに戻ると、バスが既に停留所に停まっていた。暁美は急いで走ったが、間に合わなかった。息を切らしながら、彼女はバス停のベンチに腰を下ろした。

焦らなくていい。自分に言い聞かせ、乱れた呼吸をゆつくりと整える。

気持ちが悪く着くと、瞳を閉じて走るルルの後ろ姿を思い浮かべた。自分の望む方へ。振り返ることもなく、楽しそうに駆け出していく。

心地よい風が吹いている。懐かしいルルのおいが、暁美の鼻をくすぐった気がした。

完